

為せば成る

上 廣 榮 治

先月号では「理想と実践」についてお話しましたが、「実践」を考えるとときに、いつも思い出すのが、「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」という有名な言葉です。

ここでいう「為せば」は強い意志を持って「実践すれば」という意味であり、「成る」は願いが「成就する」ということです。人にできないことなどない。できないのは、何も実践しないからだ。願いの成就是向こうからやってくるものではなく、自らの実践努力で獲得するものだ、という主体的な心の構えを説いたものです。

たしかに、かつての日本人には、「やってできないことはないはずだ」という理屈拔きの信念と、「できないければ、できない理由を克服して、できるようにしてしまおう」という少しがむしゃらともいえる気概や氣迫があったように思います。しかし、現代人は利口りこうになつた分、「できないものではない」と合理的に判断して、あっさり諦めてしまふ傾向があるように思えてなりません。近年の我が会の伸び悩みも、その辺りに一因があるのではないかと、反省されるのです。

さて、この「為せば成る」という言葉は、誰が言い出したものかご存じでしょうか。かつて、内村鑑三が五人の「代表的日本人」の一人として取り上げ、アメリカのケネディ元大統領が「最も尊敬する日本人」として名を挙げた上杉鷹山（治憲）の言葉です。

鷹山は今から二六〇年ほど前、九州の小藩の藩主の次男として江戸の藩邸で生まれ、跡継ぎのいなかった米沢藩主上杉家の養子になって、十七歳で藩主となります。

上杉家といえは、戦国の武將上杉謙信以来の名家です。しかし、かつて会津百二十万石を誇った上杉家も、関ヶ原の敗戦で米沢三十万石に移封、さらに十五万石にまで減封され、家臣も領民も貧困にあえいでました。当然、藩の財政も火の車で、借金は二十万両にも上っていました。追い打ちをかけるように凶作と飢饉が続き、田畑は荒廃し、重い年貢に農民の逃散もあいついで、藩内では藩を幕府に返上してしまおうという議論さえ出ていたといえます。

そんななかで藩主になる鷹山に、学問の師であった細井平洲は、「勇なるかな勇なるかな、勇にあらざして何をもつて行なわんや」、勇氣をもつて自分の信じる道を貫きなさいと、エールをおくりまします。藩主として必要なことはすべて学んだはずだ。あとはそれを実行する勇氣だけだということです。

平洲は学問を、ただ知識を得るためのものとは考えていませんでした。「学・思・行」の三つ、すなわち学び、考え、実行して、はじめて何かを学んだことになるのだ、と言っています。たとえば、この「倫風」誌を読んでみると、さまざまな知識やより善く生きる知恵を得ることができそうです。しかし、それを消化し自分のものとして実践に移さないかぎり、倫理を学んだことにならない、ということですよ。

かくして藩主となった鷹山は藩政改革に取り組みますが、鷹山の真骨頂は、改革の大目標を「お家再興のため」でも「藩のため」でもなく、「領民の仕合わせのため」に行なうと定めたことでした。「君主は民の

たににある」という彼の信念は、終生変わることがありませんでした。

鷹山の改革は、まず足許の江戸藩邸での生活から実行に移されました。食事は一汁一菜とし、衣服は綿衣に。五十人いた奥女中は九人に減らして、虚礼を一切廃止するなど、藩主の生活費を七分の一にまで切り詰めて、自ら大儉約令の範を示したのです。

儉約だけでは財政再建はできません。鷹山は桑、漆、楮、藍など商品作物の増産と、織物業などの殖産興業を進めました。また、新田開発や飢饉に備えた粉蔵の建設、河川の改修や橋の架け替えなどの公共事業も行ないました。それらはいずれも、家臣たちが率先して労働に従事したという点で、他に例を見ないものでした。

鷹山は民政にも力を尽くしました。代官の世襲を廃止し、慈愛をもって民に接する人材を代官に登用し、生産の実を挙げた者を表彰するなど農民の「自助」を促し、農民同士が助け合う「互助」組織を作つて、それでも生活に困窮した子どもや老人、病人や妊婦に対しては、これを「扶助」しました。いわゆる、「自助・互助・扶助」を三位一体とした改革です。

また、藩内各地に医師を置いたり、鯉の飼育を奨励するなど農村の食生活の改善にも取り組みました。こうして鷹山は、領民たちに生きる希望を取り戻させていったのです。

改革の道のりは長く、困難の連続でもありました。しかし、鷹山は七十二歳で亡くなるまで、死力を尽くして領民のために働きました。いつしか、米沢藩の借財はなくなり、間引きや姥捨の悪習も、飢饉による餓死者も、藩内から消えていました。

鷹山の葬儀の日には、数万の領民が沿道に伏して柩を拝み、すすり泣く声は山野に満ちたといえます。

多くの藩政改革が挫折し、失敗に終わったのに対して、米沢藩の改革が成功した理由は明らかです。改革

の目標を「領民すべての仕合わせのため」と定めたことで、武士も領民も巻き込んだ藩を挙げての改革運動になったことです。領民を豊かにすることで、藩の財政も立ち直っていったのです。

しかし、領民の暮らし向きを豊かにすることだけが鷹山の目標ではありませんでした。家臣と領民の心の改革こそ、真の目標だったといっているでしょう。そのために鷹山は藩内各地に領民を善導するための役人をおいて、次のような任務を与えました。天道を敬い、父母に孝行し、家内睦まじくすることを領民に教えること、弱者をいたわって渡世させ、民の害を除き益をはかり、諸役人の不正を見逃さないことなどです。領民に人の道を教え、倫理にそつてより善く生きるように導かせたのです。

また、鷹山は、改革の柱に「人づくり」を据えて、藩校「興讓館」を作り、師の細井平洲を招聘しました。平洲は学ぼうとする者には身分性別年齢を問わずに教え、多くの人材を育成しました。鷹山が家臣を農作業や開発事業に従事させたのも、家臣の意識改革を考えてのことでしょう。

こうして、労働を喜び、老人を敬い、弱者は近隣で面倒をみて、飢饉に際しては裕福な者が競って貧しい者を助けるといふ風が、この地に生まれたのです。明治の初めに、米沢を訪れたイギリス人旅行家イザベラ・バードは、ここを「アジアのアルカディア（桃源郷）」と呼び、「美しさ、勤勉、安楽に満ちた地域」と絶賛したのでした。

それにしても、理想を見据えて実践努力を続けること五十余年です。鷹山を突き動かしていた原動力は何だったのでしょうか。「領民の仕合わせ」こそ、鷹山自身の仕合わせでもあったのだと、私は思います。改革を推し進めることが「自他一如の仕合わせ」だったからこそ、その理想に向かって、実践努力を続けることができたのです。「為せば成る」という信念を生涯貫き通すことができたのです。さて皆さんは、この鷹山の実践から何を学びますか。